

## 都・建設予定地 生活記 (7)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

---

インドはRPGに似ている。最初は誰もが何気ないことであっけなく体調を崩し、簡単な手口にだって引っかかる。住んでいるうちに、だんだんとレベルが上がり、ちょっとしたことなら動じなくなり、対処法がわかってくる。一人でできること・行ける場所が少しずつ増えてくる。インド通算で2年半は超えている。レベルもそれなりに上がってきた。

だがここには一人でこられない。両脇は見渡すかぎりの荒野が広がり、左右を区切るように一本、舗装された道がどこまでも延びている。僕らを乗せた車はぽっことそびえる歪な形の岩山を横目に爆走し続けていた。

「道の両側にバス停があって、そこを曲がるんだよね」と先住民の絵画が描かれた家にたどり着くための道を探しながら、飯田さんは言った。十数分前に言っていた「両側が畑になっているところを左」という目印よりは、希望が持てる。「少なくとも光が見えた感じがする」と久保さん。僕もそう思う。この荒野で畑を目印にするのはレベルが高すぎる。

「そこで聞いてみようか」と僕らは路肩のたばこ屋の前に車を止めた。寝転がっていた店主に本に載っていた写真を見せると、のそのそと起きてきて「そんな絵、どこにでもある」とたどたどしくも聞き取りやすいヒンディー語で言った。「その家にもあるぞ」

たばこ屋から数十メートル離れたところ、乾いたトウモロコシの芯が散らかる地面を踏みしめた先に、小さな家が建っていた。土と糞を混ぜあわせたようなにおいが、ぷんと立ち込めている。庭先に立派な角を生やした牛が繋がれ、干からびた草を食んでいる。女の人と子どもたちが、軒先から外国人三人組の到来を不安げに見つめていた。

「この絵を見せて欲しいんだけど、ここにある？」と写真を指差すと、小さく頷いて家の中に招き入れてくれる。外は四十五度の炎天下だというのに、家の中はじっとりとして暗い。暗がりの壁にうっすらと、絵が描かれているのが見えた。逆光になった子供の影が「バッテリーあるよ」と懐中電灯を持ってくる。バッテリーが懐中電灯の意味になっているらしい。

ぴかり、とバッテリーが灯る。壁が白く光って、暗闇の中で微かに見え隠れしていた絵画に色がつく。先住民の絵画、と言って想像するような単純な色彩ではない。青や緑、オレンジ色など鮮やかな色彩がふんだんに用いられた馬が、一方向に首を向けて行進している。それが何匹も何匹も、壁一面に均等に並んで描かれていた。ものすごい情熱を持って描かれた絵は、眼前に迫ってくるような迫力がある。

「この家に来たのははじめてだな」と、飯田さんが言う。「ヒンディー語ができる人がいたからだな」

でも、そうだろうか。ヒンディー語もなしに何度もこんな奥地まで辿り着いていたんだから、いつかはこの家だって見つけることになったはずだ。

きっとインド生活に必要なのは、情熱なのだ。何かを成し遂げようとする情熱。言語は、知っていればちょっと楽になるというだけのものだ。情熱が僕らのレベルを上げてくれる。どこまでも連れて行ってくれる。生きにくい土地を、ちょっとでも、楽しくしてくれる。

一方をひたすら目指すピトラの馬を眺めながら、ふと、そんな気持ちになった。

---

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。